

集団の中で、楽しみながら活動する子

小 谷 重 之

はじめに

A男は、集団での話し合い場面に、学習から離脱することなく着席して参加している。但し、他の生徒と同じ空間を共有しているだけといった印象を受けることが多く、自ら発言する場面は少ない。促せばなんとか自分の思いを発言することはできる。また、小学校5年生までに学習する漢字が含まれている文章であれば読む力があり、簡単な内容の日記を書く力もある。しかも自らの文章に感情が表現されるのも大きな特徴である。

精神発達遅滞と自閉的傾向を併せ持つA男の以上のような個性を生かしながら、A男の生活を少しでも他の生徒や学級集団と関わらせることができないものか。こうした問題意識をもち、A男の指導に取り組んだ経過について述べてみたい。

1 プロフィール

(1) 生育歴

- ・昭和55年9月18日生13歳4か月男子（一人っ子）
- ・出生体重3900g ・首のすわり3か月半 ・歩き始め1歳
- ・1歳までに発熱で数回小児科医へ通院
- ・N保育園 3年通園
- ・K小学校（心身障害児学級） 6年通学
- ・平成5年4月 本校入学（中学部1年）
- ・入学時身長：163.5cm 体重：66.8kg（肥満度+25）
1月現在身長：168.5cm 体重：67.2kg（肥満度+15）

(2) 諸検査による実態

- 知能検査 IQ54（V IQ47以下 P IQ72）WISC-R

言語性IQより動作性IQが優位なA男については、聴覚刺激より視覚刺激の方がコミュニケーション手段としては受け入れやすいのではないかと推測される。

- S-M社会生活能力検査 SA6：3

身辺自立	移 動	作 業	意志交換	集団参加	自己統制
7：0	6：6	7：5	6：8	5：5	5：8

- コミュニケーション・サンプル A男の会話を分析すると、会話の対象が教師を含めた周囲の大人に限定されることが多い。その内容もテレビで発信される言葉・台詞・CM・効果音のコピー



運動会で黄組を応援するA男

が多く、機能面では『その他』に分類される。

(3) 行動特性

- ・選択肢を準備すると、自分の思いにより近いものを選択することはできるが、そうでない場合はオウム返しの会話になることが多い。
- ・自分の意にならない場合、周辺にある物を床に投げつけたり、周囲にいる友人を叩いたりするといったパニックを起こす。同時に自分の頭を叩いたり、指の関節を咬んだりする自傷行為を起こす場合もある。
- ・集団での学習には一応着席して参加できるが、積極的に発言することは少なく、指名されればなんとか発言するといった様子である。休憩時には図書室で図鑑類をみることを好むが、晴天時には自転車でグラウンドを走り回るようになった。

2 取り組みの構想

(1) 指導仮説

〈仮説〉 A男の問題点は、教師を含めた大人との会話は多いが、生徒間のやりとりが少ない、あるいは、やりとりを好まないといった現状にある。そこで、A男の現在の力を伸ばしつつ、中学部生徒全体との意志交換の場を設定し、意志交換の機会を拡大することが、コミュニケーション能力を高めることにつながると考えた。

↓
目指すコミュニケーション像：場や相手を意識して、適切に応答する子

↓
〈つきたい力〉 *少しは集団とともに活動しようとする意欲
*言葉による自己統制（行動統制）が可能になる素地

↓
〈指導方針〉 受容・表出・意欲の三つの視点より指導方針を立てる。



パニックを起こし、泣き出すA男

(2) 指導の手立て

自分なりの見通しがもてたり、おもしろさを感じたりした活動には、集中して参加する現在の力をいかして、A男の活動を他の生徒との関わりへ広げたい。特にコミュニケーションの力を高める指導については、①受容②表出③意欲の三つの視点からアプローチする。

- ①受容……聴覚刺激より視覚刺激を通して指示を入力する。反復させることで感覚的に体得させる
- ②表出……選択肢の準備と書く作業を心掛ける
- ③意欲……興味や関心を示すときの仕草を見逃さないように観察する

また、実践の場としては、次の三つに整理することができる。

- ①生活単元学習……各単元ごとに生活経験を拡大する。ひとつひとつ成就感を積み上げる。
- ②課題別学習……正しい表現をモデルとしてまねる。現在の基礎学力を生活に即した力へと広げる。
- ③日常生活の指導……活動のパターン化によって見通しをもたせる。仲間づくりの重要な時間ととらえ、学級集団への働きかけの場を設定する。

以下の指導の実際では、特に力を入れて指導した生活単元学習での実践と日常生活の指導の実践を記す。

3 指導の実際

(1) 生活単元学習での実践

K小学校心身障害児学級の小さな集団で6年間を過ごしたA男にとって、入学直後の数週間7名の学級集団と21名の中学部生徒集団との毎日とはまどいの連続だったことが想像できる。

A男が中学部テーマ『楽しんで、人とかかわる子』にアプローチするために、どうしても考慮しなければならないのが、今までの生活で獲得している力を引き出しつつ、生活経験そのものを拡大することである。

① 野外炊飯の実践（学級集団での活動）

なんとか集団での活動の輪に加わり始めたA男がもっとも興味を示したのが、調理であった。入学当初の校内宿泊学習でも調理の時間になると不思議に集中し、野菜を切ったり、カレーを煮たりといった様子であった。とにかく4月は、A男と担任教師との1対1の関係作りの時期であり、A男が興味・関心を示す仕草を見逃さないように観察を続ける時期であった。

そして、5月の野外炊飯では、A男の特性を生かしつつ、A男と担任教師との1対1の固定した関係を少し緩め、A男の活動を学級集団での活動と少しずつダブルさせることを意識した。

題材名	人とかかわるA男のすがた
なべつかみ作り	手先は器用で丁寧な作業を得意とするA男にとっても、針と糸との格闘のようであった。しかし、教師の援助を好まず、多くの作業を自分なりの見通しを立てて進めていった。他の生徒と比較すると時間は要したが、なんとかタオルと軍手を縫いつけることができた。
テーブル作り	持ち運びが便利なテーブルに装飾をする活動である。中庭の芝生に座り込み、釘と金づちをもち作業を始めようとする。「M君・S君の作業を見て」と指示すると、2人の作業をみながらきりで穴を開けることに気付く。手順が明らかであると、作業に集中するA男の特性である。
野外炊飯当日	担任教師と2人組になり、かまどの準備を行う。下見(77頁参照)の段階で、かまどは草むらに点在する手頃な自然石を利用することになっており、2人で石集め・石運びを始める。その後スコップで砂地を掘り、まきを燃やしやすくした。「重い!重い!」と言いながら石を運んだがスコップでの作業も意欲的に行う。カレー作りでは、担任教師の指示を受ける場面もあったが、はんごう担当のH男と2人でまきを運んだり、火加減を調節したりした。

② ミニキャンプ～大山林間学校の実践（中学部縦割り集団での活動）

1学期も後半になると、A男を含め学級全体がある程度落ち着いて学習に取り組むこともできるようになってきた。同時に、この時期には担任教師との1対1のつながりを解き、A男を2・3年生と徐々にかかわらせることが可能になったと判断した。7月のミニキャンプから10月の大山林間学校までの様子を次の表に記す。

ミニキャンプ	大山林間学校
<ul style="list-style-type: none"> 話し合いには迷惑をかけず参加できた。返事もよい。問われたことには一応答えていた。 初めて経験することには、その場から離れがちであった。名前を呼ばれると戻ってくることはできた。 テント設営のように2度、3度と繰り返すことについては、指示に応じて活動しようとしていた。特に、支柱を立てる作業については積極的であった。 	<ul style="list-style-type: none"> 話し合い活動では、まだ教師の声かけや援助を必要とした。(自発的な発言には至っていない) 少しはみんなと一緒に活動しようとする態度が見え始めた。特に自分の興味がある内容(石地藏作りや校外学習)については意欲的であり集中力も持続した。 金額を考えたり、品物をみたりしながら買い物をするには、まだ慣れていない。

(2) 日常生活の指導での実践（主として日記の発表の機会を利用した指導）

生徒間の意思交換の力を高めるために、学級の朝の会（主に2校時にあたる時間）を大切な場としてとらえた。自閉的傾向にあるA男・K男・N男を含む1年の集団にとって、コミュニケーション能力を高めるためにも、場の設定に教師の工夫が必要である。

① 質問に答える工夫

自閉的傾向をもつA男の日記は、事実の羅列に終わることが多い。そこで、他の生徒に『なぜ』というカードを提示して、1つの事実に対する疑問を投げかけさせるようにした。『なぜ』という疑問を投げかけられるとA男はたいてい、投げかけられた疑問の言葉をそのままオウム返しに口にすることが多い。しかし、幾つかの選択肢を準備すると、その中で判断することはできる。ときにはA男の思いと相反する言葉を投げかける場合もあった。そんなときには首を大きく振って「違います」「違う」「いけん」などと否定する。否定しながらもその都度なんとか質問には答えようと努力する姿がみられるようになった。

② 質問を引き出す工夫

前記のカードの他に、『いつ』『どこ』『だれ』『なに』『どんな』を用意した。これらを手がかりに他の生徒の日記に対する質問を引き出そうとした。特にカードを準備しなかったときは、相手の日記の文章に記されている内容（つまり、A男にも解答が判っている事柄）を質問することが多かった。カードを準備するとそれを手がかりになんとか質問をしようとするために、『どこ』『だれ』を使っていた。しかし、この2つのカードに頼りすぎると、逆に、『日記の中に書いていました。A君、聞いてください』と切り返させるようになった。『どんな』を手がかりにすると、次にくる言葉が適切であればうまく質問ができるが、そうでない場合にはA男もどうしてよいかわからないようになってしまうのが、現在の状況である。



なんとか質問を考えたA男



S男と戯れるA男

4 考察と今後の課題

少しずつ仲間を意識して人と関わりを持とうとするようになったのは、一定の成果と考えられる。また、授業研究会や参観といったA男自身がかかなり緊張したり意識したりして『聞く』『話す』場面では、ある程度適切な対応ができるようになった。それが、指導の結果なのか、あるいは、本来A男自身がそのような力を持っていたにもかかわらず発揮できていなかったのか、今の段階では明らかではないが、人との関わりを持つ場面を設定したことがA男の変化に結び付いたと考える。

最後に、かなり豊かな感情表現ができるA男の特性を伸ばす指導は、今後の課題である。